

ヤスクニ・レポ 252

福音宣教の課題としての原発・放射能汚染問題

住吉 英治 (日本同盟基督教団勿来キリスト福音教会牧師)

はじめに

この通信欄にかかせていただくことを嬉しく思う。私の役割は福島から原発問題、放射能汚染問題等をお伝えすることにあると思う。しっかりと発信できればと願う。

足下の問題

原発等の問題を書かせいただく前に、一言述べておきたい。私が現在の日本同盟基督教団・勿来キリスト福音教会に赴任したのは2008年の事であった。私の前任の教会は都内にある〇教会であった。その教会は戦前戦中を経験している歴史のある教会であった。〇教会に赴任し、その後週報、月報等を見ているといわゆるヤスクニ問題・偶像崇拜問題等のページが目飛び込んできた。これらの事には前から関心があり、多少の知識があったので、驚いた。こんな歴史のある教会に私は遣わされたのだと!!

少しその内容を紹介しておきたい。

某年2月11日(日) 紀元節奉祝礼拝

黙禱、讃美歌、主の祈り、聖書、国歌一君が代二唱、祈禱、説教「祖国の為に」・・・

某年4月29日(日) 天長節奉祝礼拝

・・・国歌一君が代二唱・・・説教「神を畏れ王を尊べ」・・・

こんな具合である。私は事の深刻性を受け止め、役員会で取り上げ、共に教会として悔い改めましようとして勧めた。当時、日本キリスト教会横浜長老教会(現「横浜桐畑教会」)の牧師・登家勝也先生にも説教でお話しいただき、午後に学び会などもした。教会の年配者の方もこれらの歴史を知らなかったようである。

結論は、これらヤスクニ問題・偶像問題を共有認識するに至らず、私は力尽き矢折れ、〇教会を辞することになった。牧会力の足りなさも痛感した。当時この課題をもう少し先延ばしにするか、今やるべきか迷った。

それから13年。あの時取り組み説教したことが今日の前に更に装いを新たに付加し、強大化して迫ってきている。足下の問題は爆弾を抱えているようなもので一筋縄ではいかぬ。日本の各教会、歴史のある教会は大丈夫だろうか。

原発爆発事故から10年

原発事故は起こる

「原発事故は起こる」と受け止めておいた方が良い。福島原発も起こるべきして起こった爆発事故である。しかし、当時の責任者たちは責任を取ろうとしない。ここに大きな問題がある。国内には今54基の原発がある。教会は自分たちを守り、地域の人たちの人権と生活を守る責務を負っていると行って良い。

原発は悪か善か

原発の是非論、善悪論を語る時、そこにエネルギー問題があることを覚えておきたい。政治家が常に経済的「成長!成長!」と脅し文句を吐く時、そこにある「心の豊かさ」と「生活の豊かさ」のバランス。キリスト教会はここにどう切り込むのか。私たちの共通課題である。

復興ではなく新生を

福島、それも原発のある双葉郡には復興など無い。あり得ない。現在の双葉郡への帰還率は約2割。復興ではなく新生を、キリストにある新生を。キリストにある生活の新生、希望の新生、宗教(?)の新生を。これが私の願いである。

双葉希望キリスト教会の働き

この4月4日(日)のイースターから勿来キリスト福音教会の伝道所「双葉希望キリスト教会」(富岡)で礼拝をスタートする。それは「福音宣教の課題としての原発・放射能汚染問題」への取り組みでもある。お祈りいただきたい。

日本同盟基督教団・勿来キリスト福音教会 牧師
住吉英治 (クリスチャン新聞3月14日号8面参照)
Nakoso-ch@gaea.ocn.ne.jp

2021年2月19日例会奨励「取り入れる時が」

ヨハネの黙示録14章15節 星出卓也(日本長老教会西武柳沢キリスト教会牧師)

先の14節でキリストの手に鎌が握られていたことが書かれていましたが、この鎌は収穫を刈り取る鎌です。続く17節以降にも、同じように「鎌」が登場しますが、その「鎌」は神の怒りの酒ぶねに投げ込むための実を刈り取る鎌であります。つまり17節以降に登場するかまは、神の裁きの実を刈り取る鎌。この15節でキリストの手ににぎられている「鎌」は、神の蔵に納める収穫を刈り取るための「鎌」で、「鎌」は「鎌」でも、15-16節の「鎌」と17節以降の「鎌」とでは、役割が全く違います。

裁きの実を刈り取る鎌と、収穫の実を刈り取る鎌。両者はおなじ「鎌」であります。収穫を刈り取る方の鎌は、キリスト御自身の手にはっきりと握られて、キリスト御自身がその収穫をなさるかのように書かれています。17節以降の裁きの実を刈り取る鎌を握っているのは御使いであるのと対照的で、キリストに贖われ、神のものとなった人々は、キリスト御自身がその収穫の実を丁寧に刈り取るのです。御使いに「やっといてね」と任せることをせず、ご自身の手で収穫の一つ一つをめぐるように、丁寧にキリスト御自身の手によって収穫をされます。

やがて来る終わりの時の号令が鳴り響く時には、備えられた鎌をキリストが握って、その大いなる収穫をします。地の果てから地の果てに至るまで、実った地の穀物を一つも残らずに刈り取る時が来るのです。

地に属する人々にとっては、この日は大いなる悲しみの日となります。なぜならそれは創造主である神を認めず、従いもせず、今まで天から差し伸べられ続けてきた救いの道を拒み続けてきた罪の裁きの時が来たことを一同が知るからです。13章で描かれてきたように獣の像を拝む地の民にとっては、主に従わない道が安泰の道と思えたかのですが、その安泰の本当の化けの皮を剥かれて、大いなる悲しみが襲う時を迎えます。一方で、この世にあって主に従う御国の労苦に与った者たちの労苦が、この時報われて、選ばれた者として天の果てから果てまで、四方から主の下に集められる者たちは、主のものとしてその手に抱かれ、永遠に地を治めます。

この日、天の御国の労苦と忍耐に与る全ての者は喜び、この世の安泰を楽しみ、御国を知らない地の民はすべて、大いなる悲しみの日を迎えます。この日が今しも近い事を覚えて、この日の備えをせよ、と本日の箇所は呼びかけています。主イエスがもう一度、地に来たりたもうその日に、主の収穫として主の手によって取り入れられ、御国の蔵に迎えられる者であれ。その日を迎えるために、今日この日、地上においても天の御国を歩み、御国の労苦に与り、様々な世の誘惑と試みの中でキリストに従い、主を愛する今日の目を歩め、と本日の箇所は私

たちに呼びかけているのです。

「すると、別の御使いが神殿から出て来て、雲の上に座っておられる方に大声で叫んだ。「あなたの鎌を送って刈り取ってください。刈り入れの時が来ましたから、地の穀物は実っています。」

やがて必ず来る主の日に際して、主の実りとして数えられる。そのような生涯を主の恵みのうちに与えられたと思います。主の御目に実りと映ることを、この世は決して評価する事ができません。様々な困難と誘惑の中にあって信仰に歩み続け、キリストに従い続ける歩みは、主の十字架の足跡に従い続ける生涯です。そのような苦難の中を歩む生涯は、この世にとっては躓きであり愚かでしかありません。しかしそのような主の十字架に従い続ける困難の道に躓かない者は幸いです。主の御目には、そのような十字架に従う歩みこそが収穫であり実りであり、主の御目に美しい祝福された生涯なのですから。

収穫の取り入れの時はいつ来るのか。それは誰も知りません。思いがけぬ時に、盗人のように来るとイエス様は語ります。この日がいつかということについて、マタイの福音書24:36で**「ただし、その日、その時がいつであるかは、だれも知りません。天の御使いたちも知りません。ただ父だけが知っておられます。」**とあるように、御使いが知らないだけでなく、御子も知らないとは何たる徹底振りではないでしょうか。つまりキリストもこの日がいつかということについて、父の決定に完全にゆだねているということです。御子が知らないということは、第二位格の子なる神の全能性に限界があるという意味ではありません。あえて人となられ受肉されたキリストはこの父が決定をされた日がいつかを知ろうとしない、という意味です。父が権威をもって定めておられるので、キリストはその日がいつかということについては、父の決定に完全に委ねておられる。

本日の箇所でも聖所から出てくるもう一人の御使いが、キリストにその時の到来を知らせる、と語っています。このもう一人の御使いとして、その時がいつか知らないのは当然のことでしょう。父が定められた時が来た時に、神殿、つまり父の御座から送られる伝令官によって、キリストはこの世の収穫の時が来た事を告げられて、最後の御業を行われるのです。

私たちは誰一人としてその日を知ることは出来ませんが、その日が必ず来ることを今日また覚えさせてください。主の収穫を実らせるこの世の歩みを続けたいと思います。御国の忍耐に与り、今日もイエスキリストと共に十字架の生涯を歩む者とされたと思います。